



真珠の水彩。
水のメディウム



透明水彩に特殊な効果を与えてくれるメディウム。それが、イリデッセントメディウム。真珠のような輝きと光沢、そしてきらめき感が出る。絵具と混ぜて使用するだけでなく、このメディウムのみを乾燥後の画面上に塗っても独特の効果が得られるだろう。他にも、絵具を自作したり、滲みを作ったり、タッチを変えたり、マスキングをして、白抜きをしたり。そんな新しいテクニックが新しい作風を生み、水彩の世界が拡がっていくのを体感していただきたい。お近くの画材店で、<ホルベイン水彩用メディウムシリーズ>

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

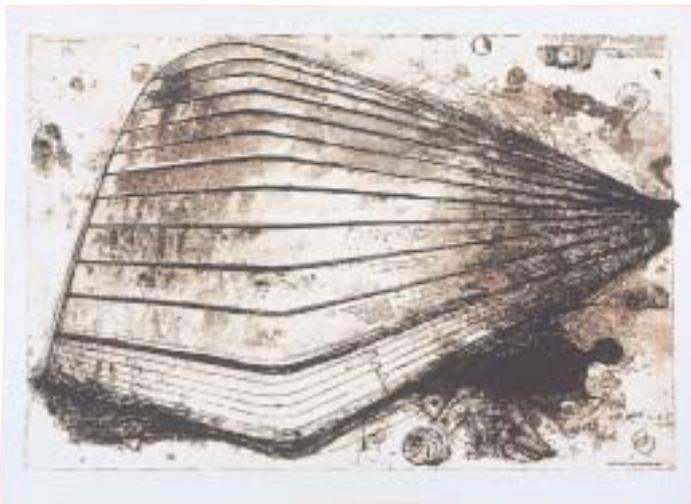
山口啓介

光を、イメージを宿す皮膜としての絵画へ

横山勝彦「文 森田兼次」写真*」



1992年2月、ニューヨークのイーストリバー、船上にて。ACC(アジアン・カルチュラル・カウンシル)の助成を受け、渡米した



王の方舟 1988 エッチング 67×98.3cm 撮影=小松信夫

1988

「銅版画はプレス機を通すと必ず終わる。後から手を加えると違和感があるのです」

大阪からJR福知山線で40分、新三田駅で下車する。さらに車で20分、天真山碩安寺せきあんに着いた。田園風景のなかに佇む小さな寺の敷地、その一角に山口啓介のアトリエがある。天井が高く、広い空間には何枚もの大きなキャンバスがたて掛けられ、インスタレーションで使用するカセットテープのプラスチックケースを収納した段ボール箱が積み重ねられている。アトリエの隅に、エッチングのプレス機がひっそりと置いてあった。

1990年代初頭に発表した一群の大型版画は、山口啓介の名前を一挙に有名にした。90年のヒルサイド・ギャラリーでの初個展以来、「第18回日本国際美術展」で佳作賞・東京国立近代美術館賞、「現代の版画1990」(渋谷区立松濤美術館・東京)で松濤美術館賞、翌91年には、第20回現代日本美術展「毎日現代美術賞」、大阪トリエンナーレ1991 版画」で銀賞、と受賞を重ねる。また、90年の「1990日本の版画・写真・立体 観念の刻印」(栃木県立美術



プルトニウムの輸送 1993 キャンパスに紙、油彩、エマルジョン、ピグメント、アスファルト
250×360cm 撮影=上野則宏 (「VOCA展'94

1993

「テレビで見た原子力発電所の、黄色いサークルのなかの無数の黒点。それが蜂の巣に、また植物の蓮のイメージに結びついたので」

館)、翌年の「マエラ」の交差点へ町田市立国際版画美術館)など、各種の企画展にも招待された。すでに88年の「第17回日本国際美術展」に発表した《草上の昼食》は三重県立美術館賞を受賞していたが、山口啓介はこの2年間に従来の版画のイメージを覆すダイナミックな大型版画で注目を浴び、鮮烈な印象を残したその作品とともに美術界で広く認知されることとなった。

山口本人は、「大型版画の印象が強かったようですが、実際はたった2年くらいしか制作していません」と語る。ヒルサイドの個展以後、「2枚を6枚に、6枚を8枚にして、そしてまた反転したり。線をやったら今度は面をやったり」と、東京郊外の福生に住んでいたこの時期は集中して版画を制作した。しかし、けっして版画家を目指していたわけではなく、1985年に武蔵野美術大学実技専修科の油絵専攻を卒業し、版画研究室で教務補助(副手)を務めたが、「版画家になるための教育を受けただけではありません」。



原子力発電所6 1995 272×360cm 紙に自家製樹脂、顔料、アスファルト 撮影=マルティン・ホフエンガルト

1年に1、2枚しか完成しない油絵、つまりいつまでも手を加えることができるために「仕上がらない」油絵に苛立っていた彼は、「プレス機を通してしまおうと必ず終わりが来る」版画に惹かれたのだという。しかし、「もともと絵画を制作する方法として、版画の手法を採り入れようとした山口にとっても、集中して版画を制作したことは、自身の絵画表現を獲得するためにも重要な契機となったのではないだろうか。ともあれ初個展以来、山口啓介は大型版画の



2002年)会場風景より 撮影=高嶋清俊

左 花の心臓/空から降る木、ポッティチェリへ 2002 キャンバスに樹脂、顔料 351×231×5.5cm
 右 花の心臓/蘭、紫の雲 2002 キャンバスに樹脂、顔料 351×234×5.5cm

2002 「2000年以降、壁に掛けるキャンバス絵画を描くようになりました。 大きな作品は立体と同じように、空間を変えられるんです」

イメージは強烈だった。92年から制作を始めた20枚の《エフラゲイ》は、ACC(アジアン・カルチュラル・カウンシル)によるニューヨーク滞在、文化庁在外研修によるフィラデルフィア滞在中を挟みながら、93年に完成する。《エフラゲイ》完成後、銅版はもういいということ、94年で終わり」とも語った山口であるが、それが素直に聞こえるほどに、この時期徹底して版画を制作したのだろう。94年からは立体を、翌年には紙の上に樹脂を混入した絵画を制作し、97年以降は自立式絵画《「ロ」T》、またカセットケースによる作品《カセットプラント》を発表、と多様な展開を示している。

しかし、山口のその後の展開を含めて考えてみても、版画を制作した体験は重要だろう。それは、版を使用することで、一挙にイメージの全体を獲得することのできる版画が、転写や増殖という表現方法を自覚させ、当初は、絵画という形式に抵抗していた彼自身の、「絵画制作の方法」を鍛えなおすことにも直結したように思われるからだ。



DU Child 2005 木版、板摺り、モノタイプ
 262.5×207cm(画面サイズ)/275×218.5cm(紙サイズ)

1994年、「大阪トリエンナーレ1994 版画」で発表した《エフラゲイ》は、20枚の版画の前に立体を置いたが、この作品が評価され、関西ドイツ文化センター・デュッセルドルフ市特別賞を受賞し、これが縁で95年からはデュッセルドルフに滞在した。かつてヨーゼフ・ボイスがいた都市である。無料で、すばらしい環境「のアトリエを提供され、個展も開催した。補助金や助成を延長しながら96年まで滞在し、「版画はつくらなかつた」が、紙の上に樹脂を混入した顔料で描いた。「遠くから見た地球のイメージ、核のバランスをテーマにした」が、「あまり社会的なものを声高に表現したくはない」と語る山口は、作品



子どもの頃は転勤族。5年ほど前、かつて祖父が住職を務めていた山懐の寺院敷地に、アトリエを構えた。多くの展覧会で多忙だが、その合間には田園に囲まれたこの地で、デュッセルドルフで知り合った音楽家の妻と静かな時間を過ごす*

やまぐち・けいすけ 1962年兵庫県生まれ。85年武蔵野美術大学油画科卒業。92～93年、渡米してニューヨーク、フィラデルフィア(ペンシルヴァニア大学)で研修。95年渡独しデュッセルドルフに滞在。おもな個展にヒルサイド・ギャラリー(東京、90、91、94、97年)、ギャラリー池田美術(東京、90、95、97、99年)、ギャラリー16(京都、92、96、04年)、95年聖マクシミリアン教会(デュッセルドルフ、ドイツ)、西武アート・フォーラム(東京)、2002年「山口啓介展 植物の心臓、宇宙の花」(西宮市大谷記念美術館)、03年「山口啓介展 空気柱 光の回廊」(高崎市美術館)、04年 fujikawa gallery / next(大阪)、05年「いのちを考える 山口啓介と中学生たち」(伊丹市立美術館)ほか。グループ展に2000年「芸術と自然 若林奮・大久保英治・山口啓介」(美濃加茂自然環境会議2000/美濃加茂市民ミュージアム、岐阜)、02年「現代美術の水彩表現 にじみ、ぼかし、重ね、線」(渋谷区立松濤美術館、東京)、「PORTABLE 劇場 BOX ART展」(新潟市立美術館、高知県立美術館ほか)、04年「HANGA 東西交流の波」(山口県立美術館、東京芸術大学大学美術館ほか)、05年福岡トリエンナーレほか。また03年、今年と「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)に参加。

がテーマのイラストレーションになることを注意深く避けながら、純粹に絵画的表現を追求している。ドイツでは、現代の世界と状況を改めて意識するようになっただけでなく、これ以後、現在に続く絵画のテーマと方法を試し始めているのである。当時は、ブルトラム輸送船、原子力発電所というように、原子力をテ

ーマとしたものが多いが、何よりもアーティストとして、「社会的な関心事を、繰り返し個人的に語るからこそ大事ではないか」との認識をもったことは重要である。また同時に、「どういふふうにしても言語化できない」という意味で、純粹に視覚的な存在の魔力を疑ったことがない」ともいうのである。個人として生きていることと表現者であることは、「制作するという行為によって、分かちがたく結びついている」ことを自覚した山口は、デュッセルドルフ時代以後、絵画や立体作品、イラストレーションと一挙に多彩な活動を展開していく。しかし、表現者として「リアル」を追求する姿勢は一貫しているだろう。

山口啓介が再び版画を制作するのは1999年も末になってからである。「ETCHINGの方法が、その頃の自分の関心の中心にあった、かたちと存在の内側の方へ、内部に向かう表出の欲望と、不意に一致したような気がした」²からにはほかならない。核施設を取材した映像を見た、黄色いサークルのなかにある無数の黒点の

イメージは、その後の展開で、蜂の巣に、また蓮のイメージへと増幅し、変形される。自立式の絵画の側面に配置した植物が封入されたカセットケースは、イラストレーションとして建築物のガラス面を覆うほどに増殖していく。版画というイメージを一挙に獲得する方法は、巨大なキャンバス上に、樹脂と顔料による《花の心臓》と題された透明感のある作品へと転換している。それはむしろ厚みのない皮膜そのものであり、イメージそのものであるだろう。彼はカセットケースに封印された植物が光を湛えているように、多彩な光そのものの表現を求めているようでもある。いま、「集中して絵画をやりたい」と語る山口は、皮膜のなかにある無限の可能性を追求している。「振り子のように出たり入ったりする連続した運動」¹から、次はどのような作品が生まれるのだろうか。

1 山口啓介「象の檻」(ギャラリー池田美術)1996年より
2 「山口啓介展 空気柱 光の回廊」(高崎市美術館)2003年より
よこやま・かつひ「練馬区立美術館主任学芸員」
8月2日、兵庫県加東市の作家アトリエにて取材